

# 子どもの歌よみ

金子彦二郎

むかし、ある田舎に大そう利口な子供がありました。  
た。

やつと「いろはにほへとちりぬるを……」など  
といふ平假名を書きおぼえたところから、日頃歌と  
いふものを作つてはたのしんでゐるお父さんの見  
やう見まねで、たゞことばを三十一だけ並べさへ  
すればうたといふものになると心得て、何でも思  
ひついたことや見たこと聞いたことを三十一文字  
に並べてよろこんでゐました。

そのなかには、まだ言葉にみがかがかけつてゐ  
ませんが、どうやら歌らしい形になりかかつてゐ  
るものもありました。

あれとこの田に蛙めが集りて

日がな一日がや〜と鳴く。

といふのや

誰やらがゆるするやらしてはら〜と

こやしのどぶに櫻ちるなり

といふものなどがありました。それを。歌の道に  
明るい人を見て「七つ八つの子供にしては大出来  
だ、うまい〜。」といつてほめて、半紙一帖を景  
物として與へましたので、その子供はもう鬼の首  
でもとつたやうによろこんで、それからはずすま  
す熱心に、うたの方に心を入れるゐました。

この小歌人は、又「どこの七つ八つの子供たち

と同じやうに、相撲をとることが大好きでした。

ひまがあると、近所の子供たちと、前の草原で、足柄山の金太郎のやうに赤い顔をして、「ハツケヨイヤ、ノコッタ〜」の行司の聲をうしろに聞きながら元氣よく相撲をとつてゐました。

ある日のこと、いつものやうに相撲をとつて打興じてゐましたが、どうした拍子か、足にすこし怪我をしました。お母さんが大層心配して、いやがる子供を無理に拘さかゝへて家へ連れ歸り、傷のところを繻帶をしてから、「おとなしく寝てゐるんですよ。」とたしなめて寝かせつけました。

ほんのかすり傷ぐらゐで、眞晝中寝てゐることなんかいやでいやでたまらない其の子供は、でも暫くは蒲團の襟から頸を出して、神妙に天井の節穴なんかを數へてゐましたが、庭前の梅の木へ、蟬が一羽飛んで来て、「ミ〜〜〜」とやり出すと、もう逆もじつとしてはゐられませんでし

た。

丁度お母さんは御用でお臺所の方へいつて、誰もやかましくいふものがゐないのをよい機會と、そろりと蒲團の中からぬけ出して、「どれあの蟬をとらまへて……」と庭下駄をつゝかけて出ようとする時、あひにくお母さんが歸つて來ました。「これ〜坊や、何です。今から動き出してはいけません。ほらお父さんが……」

といふなり、折角今梅の木の枝の蟬のゐどころを見つけたところを、又抱さかゝへて引戻されてしまひました。

仕方なく、またお蒲團の穴へもぐり込んだ子供は、退屈しのぎに硯箱と紙とを枕もとに取りよせて、「へへののもへじ」や「へよまむし入道」やでん〜むしなんか書いて慰さんでゐました。

あくる朝、お母さんが、いろ〜と書き散らしてある樂書の反故の始末をするとき、ふと見ると

## 新刊紹介

## 新作童話 打たずに鳴る太鼓

東京女子高等師範學校教師 金子彦二郎著

本書は東京女子高等師範學校教授でつた金子彦二郎氏が屢々本誌に寄稿せられた童話を中心として新作のもの二十有一篇。更に附録として「児童を喜ばせるお話の仕方」を加へて三百七十五頁。定価僅に一圓三十錢。東京昭々閣書房の處で出版のものであります。著者がはしがきに述べてゐるところによれば、

子女の教養に熱心な世の父兄から「安心して讀ませられる讀物としてどんな本がよいか」といふ聲を聞かされる毎に、「どうも責任を以て『これ』と言つて御推薦出来るものは……といつても煮え切らない答をし續けて來た私も、我が子からお話や讀物を要求される年輩になつて他事ならず眞剣に考へねばならなくなつた。」

必要は知識の母であり發明工夫の母胎でもある。この眞剣な必要に迫られて忙しい業間に主として日本民族間に傳へられた材料を種として二十篇程の童話を作つて見た。とあります。著者金子氏は教育者であり、文學者であります。しかも子供の親としての必要から作られた童話であるから、面白く文學的趣味をゆたかに含んでゐることは勿論、教育的價値の最も豊富にして小學校低學年児童にも容易に讀むことが出来る、平易なよい讀物であります。幼稚園に於て讀んで聽かせるも家庭で話してかきかせるも幼児が皆喜ぶよいお話ばかりであります。吾人はかゝる讀物が多く出版せられることを年來希望するものであります。更にかゝる良書が廣く愛讀せられて世のいかがはしきお伽噺や童話の讀物の跡をたつに至ることを熱望するものであります。

(醫峰生)

書きちらした畫の間に、みゝずののたくつたやうな字でかいたものが一枚あつたので、「何をかいたんだらう」と思つて、たどり／＼よんで見ますと

ととさまにしからるゝともとりたきは

といふ歌が一首かいてありました。

お母さんは「ホ、」と笑ひながら、「この子がまあ、ごらんなさい、こんな歌を書きまして……」と言ひながら、家中の人や隣近所の者にも見せますと、「いよう、これはく。よく並べましたな、成人したら、どんな歌よみの名人になりますことやら、頼もしいことぢや」とみんな口々に賞めはやしましたとぞ。